

幼児期に漢字が出来すぎると

漢字教育に反対ではないが、実践を躊躇している人々がいる。それは、漢字が読めるようになった子供たちが、小学校に進んで、仲間よりよく出来るということで、学習をばかにし怠けて、かえってだめな子供になりはしないか、と恐れるのである。

このような人たちは、漢字教育に反対する人々より多くいる。そしてこれが、幼児漢字教育の普及を大きく妨げているのである。しかし、このような考えを抱くということは、教育者としても最も恥ずべきことだと思う。

確かにそういう事実のあることは私も知っている。しかし、“知っている”ということと“ばかにする”ということとは因果関係はない。“知っている”から“ばかにする”のではなくて、“ばかにする”原因は他にある。

こういう子供は、知っていようが知っていまいが、出来ようが出来まいが、何事によらず高慢ちきで、真面目に努力することを軽蔑する。“知っている”ということが原因で、学習をばかにするのでは断じてな

い。

私は 30 年間、幼児や小学生を直接手に取って指導して来た。“知っている”“出来る”ということで学習をばかにし、怠ける子が全くなかったとは言わないが、それは極めて少なかった。それも既に断っているように直接の因果関係ではない。むしろ“よく出来る子”というのは、学習が好きで「よく出来るからもうやらなくてもよい」と言っても人一倍進んでやり、熱中してねばっこい子が多かった。だから、子供というものには「よく出来る子供ほど熱心に学習するものだ」と私は思っている。

「よく出来れば必ず怠ける」ということだったら、よく出来る子を作る教育は出来ないことになるのではないか。「このような考えを抱くことは、教育者として恥ずべきこと」と先に述べたのは、それが教育否定を意味するからである。

よく出来ても、怠けるどころか、益々努力するように指導するのが、教育者の務めである。それに子供の本性は、よく出来れば出来るほど、一層やりたがるものである。だから出来るように初めにその基礎を養っておいてやれば、あとはほっておいても進んでやり、向上する。

困るのは出来ない子である。出来ない、人より劣っている、というこ

とを自覚した子はやりたがらないのである。やる気が起こらないのである。なだめ、すかして励ましてやっても気が沈んでいるから、うまく出来ない。うまく出来ないから益々やる気がなくなる。この悪循環を断つことは実にむずかしい。

幼児の漢字教育は、学習を好んでやる、益々向上してやまない子供を育てるのに最も良い方法だと私は確信している。くり返して言うが、私の漢字教育は“漢字を教える”漢字教育ではない。“漢字で教える”教育なのである。だから黒田氏が指摘しているように“漢字よりも、子供の知能が向上する”この教育に期待するものである。

縁なき衆生はお釈迦様でさえも救いがたいという。私ごときが“縁”もない教育者先生や学者先生に対して、どんなに努力して説法してみたところで、何の効果もないことは当然だと覚悟している。だから今までは“縁”あって私の漢字教育を求めて来られる方々に対してだけ、懸命に説いて来たつもりである。“縁”は異なるもの味なもの、子供の頃のいろはがるたで親しんで来たこの言葉は、益々私の大好きな言葉になって来ている。

私の漢字教育は、幼児教育における最良の“因”の一つだと自負している。どうか、本誌のお蔭で、良き“縁”を得て、立派な“果(成果)”が結ばれることを期待し、念願して、稿を終える次第である。